

日本ランドスケープフォーラム (JLF)とは

1995年9月20日に発足した活動組織。ランドスケープを、環境・景観を基軸としたトータルでボーダーレスな領域として捉え、既存の職能領域をこえて、ランドスケープへの関心と責任のもと自由な開かれた交流の場を開いている。この領域に興味があり、関わっていこうとする学生や一般の人が自由に参加できることを基本姿勢としている。

HP <http://www.jlf.gr.jp/>

第4回 JLFコンペティション2008

総会、シンポジウムに続いて、神代植物公園内で屋外表彰式が行われた。受賞した2人の学生には、賞状と賞金が贈られた。



上左/参加した学生からは、「なぜ、大山さんは緑とは対局する工場などを好むのか」という質問も。上右/終始大山さんペースで会話は進行。巧みなトーク会場全体を盛り上げる



上/賞状・賞金を授与する戸田芳樹氏(戸田芳樹風景計画)、下/受賞者手前山田さんと奥小西さん

★コンペ概要

テーマ 現代の都市ランドスケープに日本美は可能か

応募作品 ①文章5000文字以内、日本語に限る

②イメージ1点/自論の説明・補強のための写真やスケッチ

締切 2008年9月1日

応募資格 大学生・大学院生・専門学校生

審査員 JLF運営委員

賞 グランプリ(5万円)、準グランプリ(2万円)、審査員賞(賞品)

★グランプリ受賞 小西岳彦(千葉大学園芸学部 修士1年)

★準グランプリ受賞 山田靖子(千葉大学園芸学部 4年)



参加者とともに記念撮影

全体が高揚することになった。

「みなさんは本当に緑に癒されますか」

ふいを付くような質問だ。

「これまで僕が話を交えてきた『景観』に関する専門家と言われる人たちの多くは、なぜ緑が必要かを明確にせず、ただの好き嫌いで景観の善し悪しを判断しているようにしか思えなかった。けれど、今回のお二人の話を聞いていると、きちんと緑の必要性を論じている。そこにとっても驚き、共感を覚えました」

その言葉を受けて、山田氏が続ける。

「確かに、これまでランドスケープの関係者は、緑が大事であると当たり前のように公言してきたように思います。緑は誰にとっても癒される対象であり、地球を守る優れたものと疑わなかった。

けれどランドスケープは社会性を持つ以上、好き嫌

いの議論ではなく、きちんと社会に位置付けて、緑の必要性を問うべき。誰かに押し付けられた価値観やただ単に緑が美しいという先入観だけでつくられたものは持続しない。持続可能な環境をつくるためには、緑が何のためにあるのか、そこから議論することが大事でしょう」

終始三人から発せられる刺激的な言葉の数々に、シンポジウムの参加者は心を揺り動かされ、最後まで食い入る様に見守っていた。

こうして、窓から西日が射し込み始めたとき、JLFの運営委員である戸田芳樹氏によってこれからのランドスケープの可能性へコメントが寄せられ、シンポジウムは閉会となった。

ところで、シンポジウムの後には、今回の総会と合わせて公募された論文のコンペティションの授賞式が

行われた。グランプリを受賞した小西岳彦さんは、現在修士論文に取り組む中、かつてから研究していた造園家深谷光軌氏の作品を中心に、「現代の都市ランドスケープに日本美は可能か」という大変困難と思われるテーマに挑んだ。準グランプリの山田靖子さんも、まだ学部生ながら初の論文へのチャレンジで見事受賞となった。

こうしたJLFの活動は、これからの多様化するランドスケープの需要に大きく貢献していくに違いない。業界間をまたぎ、緩やかな関係性の中に新たな空間デザインの可能性を導けるのがランドスケープの力。今後のイベント情報に注目しよう。